

---

# 旅

しみちゃん

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】 旅

### 【Nコード】

N9581D

### 【作者名】

しみちゃん

### 【あらすじ】

僕は『リヨウキ』と言う名前以外に何も持たない。自分を探す為に僕は旅に出た。

## （前書き）

イタリア語が所々出てきます。  
と言っても単語ですが…。

大切な物。

それは人によって違うだろう。

無くした物。

それも人によつて違うだろう。

けれど、無くしたから得る物がある。

得た物が有るから、無くす物がある。

僕は、記憶を失った。

名前以外の何も持たない僕は、旅に出た。

僕が持っていたのは、『リョウキ』という名前だけだった。

（名前と容姿からして、僕は日本人なんだろう。ここはイタリアだけど。）

何処で生まれ、何処で育ち、何をして、どの様にして生きて来たか

…何も解からない。

気が付くと、降りしきる雨の中、一人で立ちつくしていた。

ここは何処だ？

何で、何でここに居るんだ？

何も解からない…。

やがて景色は暗くなり…僕以外の全てが、闇に包まれた…。

目が覚めた。

あの時の記憶が蘇る。  
旅のきっかけが。

旅を始めて一年。

自分を求めて、只、ふらりと旅をしている。

だが、一年の旅でも、記憶は戻らない。

やはり僕は、名前以外に、何も持たない。

僕は一体、誰なんだ？

今日も歩く。

ひたすらに、歩く。

自分を追い求めて、ひたすらに…。

ふと、聞こえたピアノの音。

『テンペスト 第3楽章』

激しい頭痛が襲った。

絶えることなく続く痛みに耐えながら、朦朧とする意識の中で一つの景色が浮かんだ。

大きな、空へ真っ直ぐに伸びた木の下。

一人の金髪の女の子（外国人だろうか？）が微笑んでいた。

フワフワと風になびく、淡い、金系の髪が印象的な女の子。

知っている気がする。

でも、誰なんだ…？

とても、とても懐かしい気がする…。

『貴女は…誰ですか…？』

問うた言葉は、彼女に届かず、空へと消えた。  
後には何も残らず、彼女も消えた。  
闇が広がる。

全てが消え、現実へ引き戻された。

何故か、僕は涙を流していた。

解からない。

何故泣いている？

あの人は、誰なんだ？

知らないはずなのに、でも、何故か懐かしくて。

涙を拭いて、また歩き出す。

日も暮れ、今日は小さな宿に泊まる事にした。

部屋の窓を開けると、月が顔を覗かせた。

今夜は満月だ。

旅を始めたあの日も、満月だった。

月を見、考えた。

彼女は誰なのか。

自分は、何故彼女を懐かしむのか。

何故、あの曲と共に、あの光景が浮かんできたのか。

もしかしたら…僕の記憶に、関わっているのか…？

眠気がさし、寝る事にした。

何も無い丘の上、僕は大木の下に居た。

一陣の風が吹き、僕の隣には、彼女が居た。

『貴女は、誰ですか？』

僕は問う。

『私は……』

そこで目が覚めた。

何故…何故彼女が、また。

やはり、彼女は僕の記憶に関係しているのか？

既に、日は高く昇っていた。

宿を出、町を抜けた。

目の前には森が広がっていた。

森の中へ入る。

暫く歩くと、一件の洋館が目の前に現れた。

洋館は古く、寂れ、誰も住んでいないようだった。

森を抜けようと、足を進めようとする。

その時だった。

カラン …… コロン ……

門に付いた鐘が鳴り、門が開いた。

『誰か居るのか？』

そう問うても、返事はなく、辺りは不気味すぎる程に静かである。  
奇妙に思ふ反面、好奇心に負け、洋館へ入る事にした。

中はとても埃っぽく、長い間手入れが施されていないようだった。  
枯葉はもちろん、鼠の死骸までもが足元に転がっている。

（やはり…誰も居ないのか…？）

しかし、誰も居ないのなら、何故門が勝手に開いたのか？  
考え事をしながら歩くうちに、一際広い部屋に出た。

部屋は暗く、入った途端、かすかな鉄の臭いが鼻をついた。ようやく暗闇に目が慣れたのか、徐々に景色が把握できた。そして、その部屋に入った事を後悔した。

部屋の壁には、血と思われるものが大量に付着していた。床も、カーペットが全て赤に染まっており、人骨が散乱していた…。その光景は吐き気を催す程酷かった。

ふと、前方にグランドピアノが見えた。

ピアノの近くには、女性だったのだろうか。その死体は、女物の服を身に纏っていた。

ピアノに近づき、触れた。  
その瞬間だった。

まだ綺麗だったその部屋に、僕は居た。

（どういう事だ！？一体…）

その部屋の窓からは、綺麗な満月が顔を覗かせていた。

部屋では、沢山の人が、綺麗な服を身に纏い、笑いながら話に花を咲かせたりしていた。

『リヨウキ』

名を呼ばれ、僕の後ろには、彼女が立っていた。

『私の演奏、聞きにきてくれたの？ありがとう！』

あきらかに日本語じゃない言葉



イタリア語だった。

そう言うとな彼女はピアノの方へ走っていった。

そして、一度振り返り、言った。

『Ti amo...』

ニコリと微笑み、そして、彼女は小走りで、走り去って行った。

さっきの言葉に驚きつつ、赤面しながら、気付いた。

（また…名前聞けなかった…）

間もなく、部屋が暗くなり、よく知っている旋律が室内に響いた。

（この旋律…テンペストの第三楽章…？）

ピアノを弾いている彼女は、とても美しく、凜としていた。

やがて演奏が終わり、室内を拍手の渦が包んだ。

それと同時に、凶器を手に持った、沢山の人が扉を蹴破り、入ってきた。

そして、凶器を振るった。

断末魔の叫び声や、助けを請う声、脅えた声が木霊した。

それと同時に、銃やナイフ、マシンガンやライフルの、発砲音や、肉を切り裂き、抉り、弾ける音がした。

目の前は血が飛び交い、人が叫んでは倒れていった。

目の前の惨劇に、声も出ず、只、耳を塞ぐ事しか出来なかった。

一人が、彼女にナイフを振りかざした。

『いやあああああああああああ！！』

『アリス！！！！！！！！！！』

伸ばした手がアリスに届くことは無かった。

気が付くと、僕はアリスを殺したナイフを片手に、血に塗れながら、死体の山と血の海に囲まれていた。

足元に人骨が散乱した現実には、引き戻された。

僕はアリスだった物を抱きしめ、泣いた。

「アリス……」

守れなかった。

アリスを抱き上げ、屋敷を出た。

何も無い丘に出、あの大木の下に来た。

アリスとの思い出の場所へ。

アリスと出会った場所へ。

アリスと初めて出会ったのは、僕が5・6歳の時だった。

僕は、小さい頃から、両親の都合でイタリアに住んでいた。

けれど、子供達からは、『黄色い猿』と言われ、退けモノにされる。

その上、両親も、マフィア間の抗争に巻き込まれて死んだ。

日本に帰りたいけど、帰る術も無かった。

毎日が最悪で、退屈だった。

退屈を紛らわす為に、その日、僕はいつもは行かない森へ、散歩に行った。

その時、僕とアリスは出会った。

幼かったアリスが、この木の下で泣いていた。

『どうしたの？』

『帽子が：飛ばされて木に引っかかったの：。』

見上げると、確かに木の枝に帽子が引っかかっていた。

『取ってあげるよ。』

そう言つて、僕は木に登った。

元来、木登りは得意だったし、帽子も、そんなに高くない場所に引っかかっていたから、すぐに取り出す事が出来た。

『はい。』

アリスは泣き止んで、満面の笑みで『ありがとう！！』と言った。その笑顔が可愛くて、少し、ドキっとした。

『私はアリス！貴方は？』

『僕はリヨウキ。』

『日本人ね。ヨロシク！！』

アリスは、初めて僕を認めてくれた。

少し驚きつつ、差し出された右手を握り返し、握手した。

アリスとは、その日、沢山の事を話した。

自分の事。（僕の両親と僕の生い立ちを言うと、アリスは励ましてくれた。）

自分の趣味の事。

何が嫌いとか、何が好きとか、そんな他愛も無い話をした。アリスと話すのに夢中で、時が経つ事さえ忘れた。

気が付くと、辺りはすっかり翳っていた。

『そろそろ帰らなきゃ。お父様が心配しちゃう。』

『そっだね。僕も帰らなきゃ。』

『ねえ、また明日、会えるかしら?』

そう言われるとは思わなかった。

『うん。明日もここだね。』

そう言って手を振り、自分の家へ帰った。

両親が居ない僕。

毎日、家に帰っても暇なだけ。

近所のオバサンが料理を作りに来てくれるけど、挨拶とお礼だけで個人的な事なんか話さない。

只、退屈な日々を送っていた。

けれど変わった。

アリスの事を考えると、とても明るい気持ちになれた。  
退屈な日々が一変した。

アリスは、僕の全てだった。

それから、僕等は毎日の様に、あの木の下で話をした。

出会ってから十年後。

いつもの様に、僕はあの木の下に座っていた。

『Buon giorno!』

後ろから声がした。

『アリス! Ciao.』

『待っててくれたの?ありがとう!』

また今日も他愛のない話をする。

『あのね、今度屋敷で私ピアノを演奏するの!!聞きに来てくれる?』

『うん、良いよ。』

次の日、僕はアリスの屋敷へ行った。

（でっけえ…）

執事（？）らしき人が出迎えてくれ、中に入っていた。  
あんな惨劇が起こるとは知らずに…。

あの惨劇の後、僕はそのまま屋敷を出た。

雨が降っていた。

全てが夢であつて欲しいと願った。

全てが消えて欲しいと願った。

記憶が無くなれば良いと願った。

そして…何もかもを無くし、僕は、降りしきる雨の中、一人で立っていたんだ。

腕に抱いた、『アリス』を見た。

この一年で変わり果てた『アリス』

柔かい金系の髪は無くなり、皮膚も筋肉も削げ、白骨となった『アリス』

両親を亡くした僕にとって全てだった。

彼女が、退屈な日々を変えてくれた。

なのに…なのに、僕はアリスを守れなかった。

僕はアリスを、その木の下に埋めた。

そして、アリスの屋敷に火を点けた。

アリスを想いながら。

僕は、死ぬまで歩き続よう。

死ぬまで旅を続よう。

でも、今までとは違う。

自分を探す為じゃない。

アリスへの想いに、答える為に、旅を続けよう。

漂う様に、一人を選んで、僕は歩き続ける。

アリスが最後に言った『T i a m o 』

その思いに答える為に、僕は一人である事を、アリスに誓った。  
目を瞑り、浮かぶは在りし日のアリスの笑顔。

君は、僕の胸に、今も生きている。

供に歩こう。

蒼く、綺麗な空を見上げ、僕は言う。

『T i a m o 』

(愛してる)

永遠の愛を、僕は君に誓う。



(後書き)

B u o n   g i o r n o

c h i a o

両方ともコンニチハの意味です…;

こんな駄文を読んで下さってありがとうございます。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9581d/>

---

旅

2010年10月28日03時06分発行